

# バンコックの僧院生活

住職 黒田 武志

(大圓)

バンコックの街には、チャオ・プラヤ川という大きな河が横たわりその支流は縦横に走っている。支流とはいえ満々とした流れで、人々もまた川を棲み家としている。高いマンゴーの林を背にしなから、川にへばりつくように人家が並んでいる。何故安定した土の上に居を構えないのだろうか、疑問に思うが、家の半分は土とつながり、半分は川に委ねる、そんな生活が一番安定しているのかもしれない。茶色の濁流で食器を洗い、衣類を洗い、歯も磨けば身体も

洗う。この濁流の上を何十艘もの舟が、せめぎ合いながら水上を行き交い、食料品や日用品を売っている。おかゆやめん類の朝食も、この舟の上で作って売っている。まるで動く市場といつてよいだろう。水は空気のように人間と関わっている。

私が修行したワット・パクナム寺院もそんな川べりに建っている。

街の雑踏から道を折れてわずかばかり入ると、いつの間にか、いくつもの堂宇が建ち並ぶ

広大な寺院の中に立っている。

仏教国であるタイでは、94%が仏教徒である。そしてタイの仏教は、極めて戒律の厳しい上座部仏教（小乗仏教）で、タイの男子は一度は仏門に入る習慣があり、国王も貴族もみなその習慣に従い、仏門に入らない男子は一人前の男子として扱われない。

黄衣をまとった僧侶は、社会的にも尊敬される地位にあり、冠婚葬祭すべての儀式を司って

いる。

仏教寺院は、タイ全土に二万五千以上もあると言われている。

今やバンコックは近代化され、国籍不明の都市といった、どこの国にもあるようなコンクリートのかたまりになっているが、その中で天に突きささるような独特な建築の寺院群は、その存在をしっかりと誇り高く際立ってそびえ立っている。



郊外の農林地帯に出たとき、何かきらめくものが見えたら、それは決まって寺院である。金と緑と赤で荘厳された建物は、高く光を放つことで、人々に“心の拠り処はここに在る”と教えてくれているかのようである。

ワット・パクナムは修行の僧堂でもある。

僧院の朝は早い。それは日本と同様であろう。修行僧は、小鳥の声を聞きながら街へ托鉢に出る。街のあちこちでは食べ物を捧げる人たちが待っている。僧侶は黙ってその供養を受けても、決して礼を述べたり頭を下げたりすることはない。超然とただ受けるだけである。

托鉢が終わって僧房に戻って朝食がすむと、朝の勤行が始まる。約一時間近く読経するのだが、日本の読経は荘厳ではあるが暗さをとぎとして感じる講し方に較べて、不思議に美しいそしてやわらかな響きをもっている。

読経のあとは自分の僧房に帰って勉強するこ

とになっている。タイ語が充分でない私にとって、タイ人の先輩僧から教わる様々な戒律についての勉強は苦しかった。

上座部仏教においては、昼の十二時を過ぎると水以外の一切の食物を摂ることは許されない。厳格な「非常非食戒」によるものである。これに慣れるには時間もかかったが、慣れてしまえばむしろ快適でさえあった。血液と消化の関係から午後食事を摂らないことで一切の力を脳に集中させることになる。經典を覚えることと瞑想することが午後の時間のすべてといつていいだろう。

夜の七時から九時までは瞑想の時間で、これがすめば日課は終わり眠ることだが、高いベツトや綿の入った布団を使うことは戒律で禁じられている。木の床にゴザを敷き衣と同じような黄色の布をひろげて眠るのだが、疲れた頭を休めるには場所は選ばない。

二二七の戒律を守ることは、それだけでも厳しい行である。生活の細部にわたって厳しく律するものであるが、例えば托鉢の際も外に目をやらず鉢の中を見て供養を受くべし、食べる時も鉢の中をよく見ること、ご飯とおかずを丁度いい様に食べることなど実に細々と決められていて覚えるだけでも大変である。

女人に対しての戒律も厳しく、女人に触れるとそれ迄の修行が無に帰するとされていることからタイの女性は決してある距離以上は僧侶に近寄らない。衣に触れることさえタブーである。

食事の供養を受けるときは、テーブルに食べ物が入った器をじかに並べるのではなく、飲み物でも料理でも施主の手から僧侶の手に渡されてはじめてテーブルに置く。些細なことのようには思われるかもしれないが、ひとつひとつ深い意味に裏打ちされているからこそ、行となるのである。

テーラワーダ仏教は、戒律仏教といわれるほど、その信仰の実践において戒律が重要視される。タイの人々が僧侶を敬うのは、この厳しい規律に身を投げ入れ、実践していることに対する尊敬でもあるのだろう。タイ語を充分理解することはできなくても先輩僧の一挙手一投足のすべてが私にとっては教えであった。

